

紀要

37

- 草津市・北谷古墳群L地点出土埴輪について
 — 湖南地域出土埴輪資料の基礎的検討 — 辻川 哲朗 (1)
- 横穴式石室の構築原理を考える
 — 研究ノート：岩橋型石室を題材として — 堀 真人 (15)
- 福林寺12号墳の墳丘測量調査報告 宮村 誠二 (28)
- 近江出土の渡来銭貨 (2) 小島 孝修 (33)
- 近江における中世備前焼の基礎集成 山口 誠司 (49)
- 長浜市八雲書院資料調査報告〈瓦編3〉 福井 知樹 (57)
- 三次元データを歩く
 — 三次元データの利活用を目指して — 福井 知樹 (73)

長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編 3＞

福井知樹

目次

1. はじめに
2. 採集瓦について
3. 三次元計測の実験的試行
4. おわりにかえて—瓦編総括—

— 論文要旨 —

「八雲書院」とは、浅井郡田根村大字上野（現長浜市上野町）出身の田中礎氏が収集した考古資料一式のことである。同氏は、昭和 27 年 (1952) に収集した資料群を「郷土史研究に役立ててほしい」という思いから、浅井町立浅井中学校（現長浜市立浅井中学校）に寄贈した。寄贈された資料群は「八雲書院」と命名され、浅井中学校から地域資料の魅力を発信していくこととなった。平成 6 年 (1994) に「八雲書院」は浅井中学校から浅井町歴史民俗資料館（現浅井歴史民俗資料館）へ移管された。

「八雲書院」の資料は、浅井中学校や郷土史研究家らによって昭和 56 年 (1981) に整理がされていたが、その時点で資料の欠番が存在していた。また、その後に資料の追加などもあり、寄贈時の目録（『八雲書院蔵品目録』、以下『目録』）と資料内容などの不一致が生じていたことから、再整理を行うこととした。この整理は、現段階における『目録』の作成を目的としている。

田中氏が収集した資料は、滋賀県内だけではなく、京都府、奈良県、大阪府や北海道など広範囲におよび、出土地など当時の情報をほぼ明確に示している。

収集資料のうち、本稿で扱う瓦は、古代寺院や城郭・神社など古代から近世・近代まで幅広い時代のものが採集されている。また、地域としては地元の浅井郡のみならず、田中氏が奉職していた高穴穂神社のある大津市や他府県、中国など幅広い地域におよぶ。

本稿では、収集資料のうち「長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編 1＞」（古山・福井 2022、以下、「瓦編 1」）、「長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編 2＞」（福井 2023、以下、「瓦編 2」）に引き続き、瓦（『目録』の No. 81～120）を中心に整理を行い、その成果について報告する。なお、瓦資料については 165 点あり、本稿では未報告の 59 点について報告し、瓦資料の報告を終了する。

また、「瓦編 1」、「瓦編 2」で報告した軒瓦について、改めて三次元計測を行い、その結果について掲載した。

——— キーワード

白鳳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代 安土桃山時代 八雲書院 田中礎 丸瓦 平瓦

1. はじめに

「八雲書院」は浅井郡田根村大字上野（現長浜市上野町）出身の田中礎氏が収集した考古資料一式のことである。田中氏は昭和27年（1952）に「郷土史研究に役立ててほしい」という思いから、資料一式を浅井町立浅井中学校（現長浜市立浅井中学校）に寄贈した。その後、旧浅井町で設置された浅井町歴史民俗資料館（現浅井歴史民俗資料館）に平成6年（1994）に、資料群は移管された。

寄贈後70年を経ており、寄贈時に作成された『八雲書院蔵品目録』（浅井中学校1952、以下『目録』）と収納されている遺物との齟齬が生じていること、採集地なども記録が当時のままで現在と異なっているものもあることから、令和3年度より筆者らが資料の再整理及び現段階での目録の作成を行うこととした。

本稿は計3回のうちの最終の調査報告であり、本稿掲載分は筆者と古山明日香（長浜市民協働部）、山田梨紗子（滋賀県立大学人間文化学部）が調査を行った。なお、調査そのものは令和4年度中に終了している。

2. 採集瓦について

以下のa～kは『目録』の記載順に則る。『目録』記載事項に訂正がある場合は、随時本文中に記載する。また、未報告の瓦資料は59点あり、「長浜市八雲書院資料調査報告<瓦編2>」（福井2023、以下、「瓦編2」）に引き続き、107～165までを報告する（表1）。

瓦の部分名称は、丸瓦については「研究ノート 丸瓦の製作技術」（大脇1991）、平瓦については「平瓦桶巻作り」（佐原1972）、方形平瓦については『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2001）p.319の「方形平瓦についての参考図」に準拠する。

また、本章の記述は『目録』掲載順の採集地ごとに記載し、①は採集地の概要を、②は採集瓦の概要・注記、観察事項、その他特記事項を記載している。採集地の概要は、「長浜市八雲書院資料調査報告<瓦編1>」（古山・福井2022、以下、「瓦編1」）掲載分については「瓦編1」を参照いただきたい。なお、採集地の概要は特に出典がない場合は『滋賀県の地名』（平凡社地方資料センター編1991）及び『日本史広辞典』（日本史広辞典編集委員会編1997）に拠った。また、資料の色調は『新版標準土色帖（36版）』（小山・竹原2014）に拠った。

a.112 大津市坂本町崇福寺（図1-107、写真図版1-107）

①概要

「瓦編1」の「m.大津市坂本町崇福寺」の項参照。

②採集瓦

107 丸瓦である。凸面に「崇福寺／塔址出土」と墨と朱と白で重ねて記されている。

丸瓦の頭部から胴部で、右側面部が残る。凸面は一部縄

叩きが残る縦ナデ、頭端側は横ナデ、凹面は糸切痕と布目痕が残る。凹面頭端縁部、端面、側面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

b.113 大津市坂本町彦根堂（図1-108、写真図版1-108）

①概要

「瓦編1」の「n.大津市坂本町彦根堂」の項参照。

②採集瓦

108 丸瓦である。側端面から凹面側縁部にかけて「五箇ノ内1／昭和13、5、11日／園城寺瓦片」と墨書されている。おそらく園城寺採集のものが『目録』作成時に誤認でこちらに含まれたものと考えられる。

丸瓦の頭部から胴部で、右側面部が残る。凸面は縄叩きのちヘラケズリと一部横ナデ、凹面は布目痕と吊紐痕が残る。凹面頭端縁部、側端縁部、端面、側面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。室町時代。

c.114 大津市園城寺

（図1-109～115、写真図版1-109～115）

①概要

大津市園城寺町にある天台宗寺門派の総本山で、7世紀後半に大友と多磨が創建したと伝わる。比叡山延暦寺の山門派と長年争い、幾度も焼亡しているが、その都度再興され、現在に至っている。

②採集瓦

109 丸瓦である。凸面に「園城寺内／拾得」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、端部は残存していない。凸面は不定方向のナデがされ、凹面には布目痕と布袋の綴じ合わせ痕が残る。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。奈良時代。

110 丸瓦である。凸面に「園城寺」と墨書されている。

丸瓦の頭部から胴部で、左側端面が残る。凸面は横ナデがされ、凹面には布目痕と粘土板の重ね合わせ部が残る。端面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。奈良時代。

111 丸瓦である。凸面に「2 園城寺瓦片」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、端部は残存していない。凸面は横ナデがされ、凹面には布目痕が残る。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。奈良時代。

112 丸瓦である。凸面に「3 園城寺瓦片」と墨書されている。

丸瓦の丸瓦の頭部から胴部で、左側面部が残る。凸面は横ナデがされ、凹面は布目痕が残るが、頭端から4.6cmは横ナデがされる。端面はヘラケズリのちナデがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。奈良時代。

113 丸瓦である。凸面に「4／園城寺瓦」と墨書されて

表 1 『八雲書院蔵品目録』『田中礎コレクション目録』対応表

八雲書院蔵品目録				田中礎コレクション目録				瓦編 1	瓦編 2	瓦編 3
No.	品目	採集地	備考	No.	品目	採集地	備考	資料No.	資料No.	資料No.
81	古瓦	奈良県東大寺		欠番					43	
82	古瓦	奈良県正倉院		欠番					44	
83	古瓦	奈良県唐招提寺		欠番					45、46	
84	陶棺	唐招提寺		欠番						
85	古瓦	京都市伏見桃山城		85	古瓦	伏見区桃山城	金泥が塗ってある	1	47	
86	古瓦	蒲生郡安土城跡	金泥がみられる	欠番				2	48～53	
87	古瓦	京都府下丹波周山密厳寺址		欠番					54～56	
88	古瓦	愛知県犬山城		欠番					57、58	
89	古瓦	中国蘇州寒山寺		欠番					59	
90	古瓦	奈良県橘寺		欠番					60	
91	古瓦	奈良県薬師寺		91	古瓦	奈良県薬師寺			61、62	
92	古瓦	彦根城		欠番				3、4	63	
93	古瓦	長浜城址		欠番					64～67	
94	古瓦	大津市膳所城址		欠番				5、6	68	
95	花筒			欠番						
96	古代の煉瓦	長浜市六荘町		96	古代の煉瓦	長浜市六荘町				
97	古瓦	栗田郡在原寺		97	古瓦	在原寺			69	
98	古瓦	湯田村八島救外寺址		欠番				7	70～72	
99	古瓦	京都市南禅寺		欠番					73	
100	古瓦	京都市嵯峨天竜寺		100	古瓦	京都市天竜寺			74	
101	古瓦	京都市下加茂神社旧神宮寺跡		欠番				8	75、76	
102	古瓦	甲賀郡下田上村		102	古瓦	栗太郡下田上			77、78	
103	古瓦	甲賀郡信楽宮址		103	古瓦	甲賀郡信楽宮			79～81	
104	古瓦	仰木村幸神地		104	古瓦	滋賀郡仰木村草神地		9		
105	経筒	比叡山横川如法塔附近		欠番						
106	古瓦	大津市石山町寺辺国分寺		欠番				10～12	82～90	
107	古瓦	大津市瀬田町三大寺		欠番				13	91～95	
108	古瓦	蒲生郡総見寺		欠番				14、15		
109	古瓦	大津市坂本町滋原		欠番					96	
110	古瓦	犬上郡高宮町		欠番				16		
111	古瓦	大津市坂本町穴太城址		欠番				17	97～106	
112	古瓦	大津市坂本町崇福寺		112	古瓦	大津市崇福寺		18		107
113	古瓦	大津市坂本町彦根堂		欠番				19		108
114	古瓦	大津市園城寺		114	古瓦	大津市園城寺				109～115
115	古瓦	大津市比叡山宝幢院		115	古瓦	大津市比叡山宝幢院				116
116	古瓦	大津市坂本町生源寺		欠番						117
117	古瓦	大津市大津宮		117	古瓦	大津市大津宮		20～29		118～134
118	古瓦	大津市坂本城址		欠番						135、136
119	古瓦	大津市坂本梶井寺址		欠番						137～142
120	古瓦	滋賀郡堅田町衣川寺		欠番						143、144
記載なし				記載なし				30～40	41、42	145～165

※No.については『八雲書院蔵品目録』の番号を採用している。『田中礎コレクション目録』の番号も『八雲書院蔵品目録』に準拠している。

※表は本稿が瓦を中心に報告をしていることから、『八雲書院蔵品目録』・『田中礎コレクション目録』の瓦に関わる部分（No. 81～No. 120）のみ抜粋している。

※本稿では、No. 112～No. 120までの平瓦・丸瓦を中心に報告しているため、抜けていない項目がある。

※『八雲書院蔵品目録』は浅井中学校(1952)を、『田中礎コレクション目録』は粕淵(2000)を基に作成。

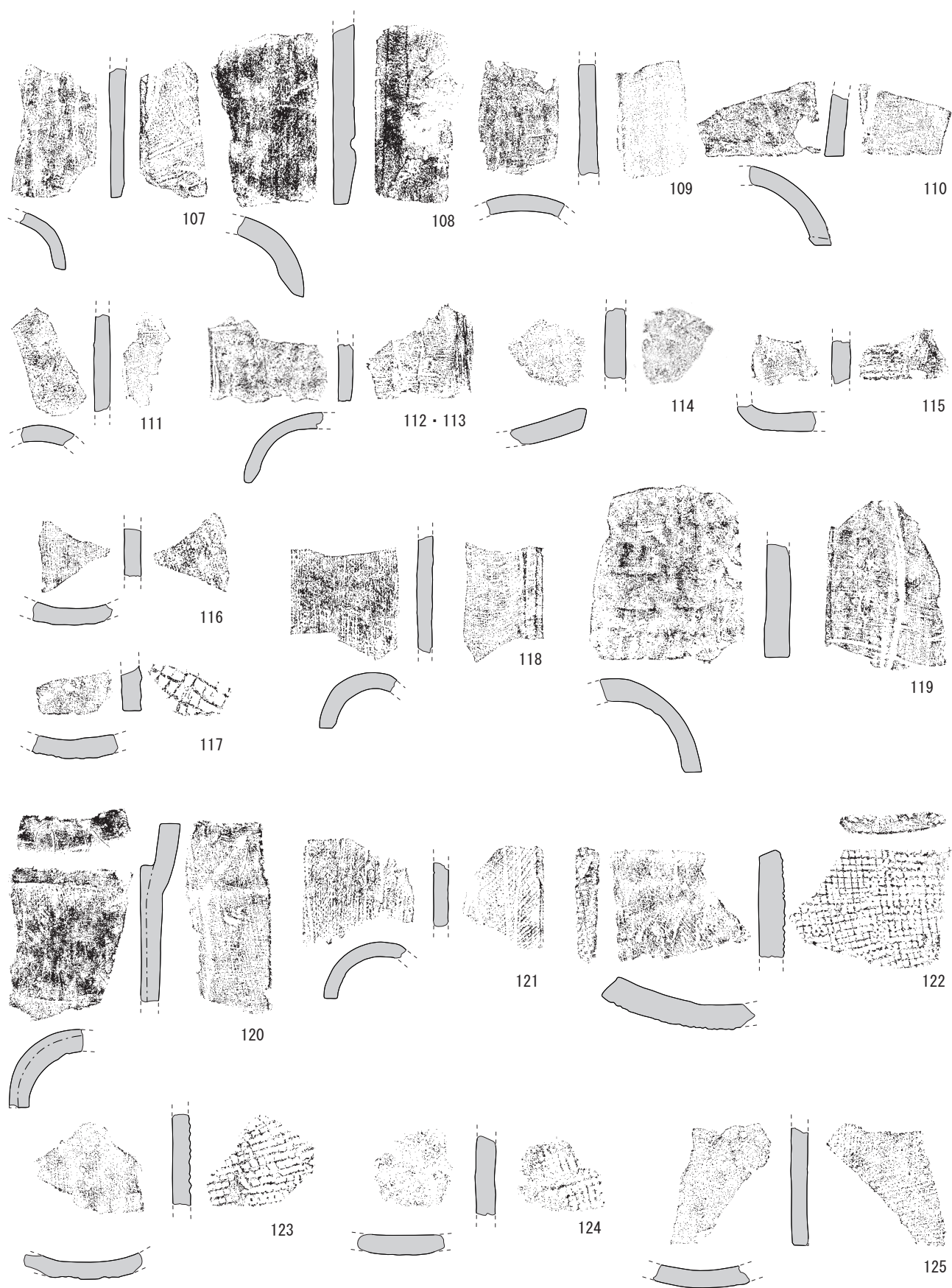


図 1 採集瓦 1 (107 ~ 125)

0 10cm
(S=1:6)

いる。112と接合する同一個体である。

114 平瓦である。凹面に「5 園城寺古瓦」と墨書されている。

平瓦の体部で、右側面部が残る。凹凸両面とも摩滅著しいが、凸面には斜格子叩きが残る。側端面はヘラケズリがされる。浅黄橙色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。鎌倉時代。

115 方形平瓦である。凸面に「三井寺山内」と墨書されている。大津宮期の園城寺前身寺院の瓦とみられる。

方形平瓦の平坦部で、端部は残存していない。凹面には布目痕、凸面には格子叩き痕が残る。平坦部から直立部にかけはナデがされる。橙色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

d.115 大津市比叡山宝幢院（図1-116、写真図版1-116）

①概要

「宝幢院」は誤植で西塔地区にあった「宝幢院」を指すとみられる。藤原良房の帰依もあり、惟仁親王（清和天皇）の御願寺として、嘉祥年中（848～851）に建立された。本院の堂宇は、至徳4年（1387）に亮海が撰述した『諸国一見聖物語』に「宝幢院旧跡」とあることから、その当時には既に廃絶していたようである。

②採集瓦

116 平瓦である。凹面に「比叡山西塔／寶幢院／跡」と朱書されている。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹面は布目痕、凸面は縦位の縄叩き痕が残る。灰白色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。奈良時代。

e.116 大津市坂本町生源寺（図1-117、写真図版1-117）

①概要

比叡山三塔の西塔にある観泉坊と並ぶ、総里坊の寺院である。最澄生誕の地とも伝えられ、山門一山の世事を取り扱っていたという。瓦自体にされている墨書に「坂本八条尻出」とあること、瓦の年代が白鳳時代であることから、大津市坂本六丁目にある、白鳳寺院跡もしくは滋賀郡銚跡とみられる坂本八条遺跡付近で採集されたものとみられる。

②採集瓦

117 平瓦である。凹面に「坂本八条川尻出／中野三郎氏寄送」と墨書されている。

平瓦の狭端部から体部で、側端部は残存していない。凹面は布目痕がわずかに残るが、ナデ消され、凸面は格子叩き痕が残る。端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

f.117 大津市大津宮（図1-118～125、図2-126～134、写真図版1-118～134）

①概要

「瓦編1」の「a.大津市大津宮」の項参照。

②採集瓦

118 丸瓦である。凸面に「3、／弥勒寺址」と朱書されている。

丸瓦の胴部で、左側面部が残る。凸面は縦位の縄叩き痕と一部ナデがされ、凹面は布目痕が残る。凹面側縁部から端面はケズリがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。奈良時代。

119 丸瓦である。凸面に「昭和十五年五月／大津宮址拾得」と墨書されている。

丸瓦の頭部から胴部で、右側面部が残る。凸面は縦ナデがされ、凹面には布目痕が残る。凹面側縁部と端面はヘラケズリがされる。灰黄色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

120 丸瓦である。凸面に「(□)／(大津宮古瓦カ)／(大正カ)(□□)」と朱書されていると思われる。

丸瓦の胴部から玉縁部で、左側面部が残る。胴部凸面は縄叩き痕が残る。玉縁接合部から玉縁部は横ナデがされる。凹面は布目痕が残る。端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成はやや不良、胎土は良である。奈良時代。

121 丸瓦である。凸面に「(□)／小金堂址」と朱書されている。

丸瓦の胴部で、左側面部が残る。凸面は縄叩き痕が、凹面には糸切痕と布目痕が残る。端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。奈良時代。

122 平瓦である。凹面に「(昭和カ)十五年五月／大津宮址」と墨書されている。

平瓦の体部から広端部で、左側面部が残る。凹面は布目痕が、凸面は格子叩き痕が残る。端面はヘラケズリのち格子叩きがされる。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

123 平瓦である。凹面に「大津宮勸学堂／拾得」と朱書されている。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹面は縦ナデがされるが、一部布目痕が残る。凸面は格子叩き痕が残る。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

124 平瓦である。凹面に「大津宮勸学院／旧迹拾得」と朱書されている。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹凸両面とも摩滅著しいが、凸面に格子叩き痕が残る。灰白色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

125 平瓦である。凹面に「7／小金堂趾」と朱書されている。

平瓦の狭端部から体部で、側端部は残存していない。凹凸両面とも横ナデがされるが、凸面には縄叩き痕が残る。端面はヘラケズリがされる。黄灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は粗である。白鳳時代。

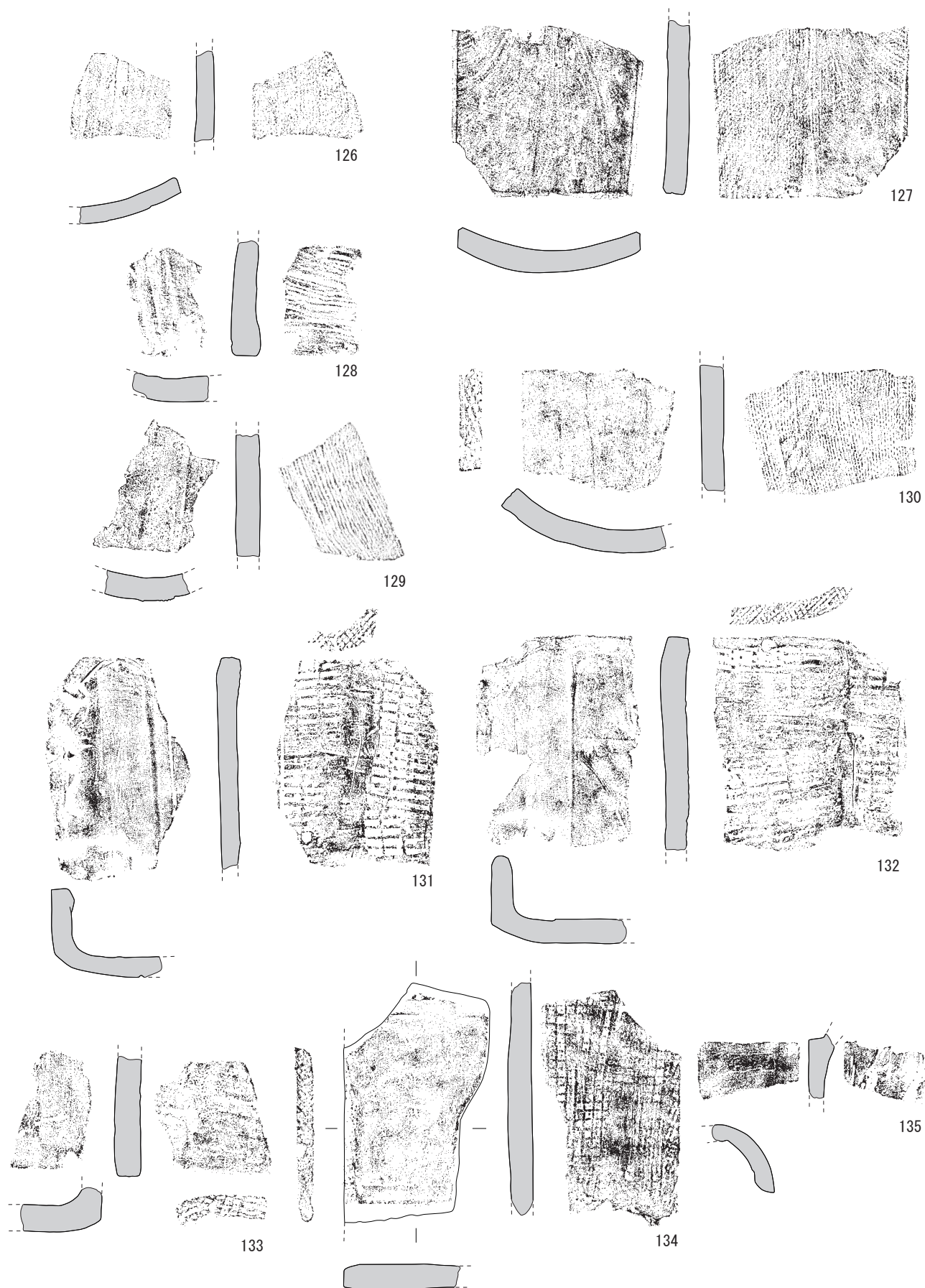


図2 採集瓦 2 (126 ~ 135)

126 平瓦である。凹面に「8／小金堂趾」と朱書されている。

平瓦の体部で、右側面部が残る。凹面は糸切り痕が、凸面は縦位の縄叩き痕が残る。端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

127 平瓦であるが、やや幅が狭いので、熨斗瓦の可能性もある。凹面に「(昭和□年拾月二日カ)／志賀宮出土／崇福寺／弥勒堂址」と朱書されている。

平瓦の狭端部から体部で、両側面部が残る。凹面は糸切り痕が、凸面は糸切り痕と縦位の縄叩き痕が残る。端縁と端面はヘラケズリがされる。黄灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

128 平瓦である。凹面に「大津宮／ワラ目一個」と墨書されている。

平瓦の狭端部から体部で、側端部は残存していない。凹面は布目痕と模骨痕が、凸面は藁状のものを巻いた叩き板で叩いたと思われる痕が残る。端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

129 平瓦である。凹面に「昭和十五年五月／大津宮拾得」と墨書されている。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹面はナデがされるが、一部布目痕が残る。凸面は縄叩き痕が残る。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

130 平瓦である。墨書等はない。

平瓦の体部で、左側面部が残る。凹面はナデがされるが、一部布目痕が残り、凸面は縦位の縄叩き痕が残る。側端面は格子叩き痕が残る。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

131 方形平瓦である。直立部凹面に「大津宮古瓦 西岡氏寄送／二個ノ一」と墨書されている。

方形平瓦の平坦部から広端部で、左側面部が残る。凹面は布目痕と模骨痕が残り、凸面は格子叩き痕が残るが、平坦部から直立部にかけてと、左側端面と凹面広端縁部はヘラケズリがされる。広端面は格子叩き痕が残る。浅黄橙色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。白鳳時代。

132 方形平瓦である。平坦部凹面に「大津宮古瓦／昭和十(□)、二、二七、西岡氏寄送」と墨書されている。

方形平瓦の平坦部から広端部で、左側面部が残る。凹面は布目痕と模骨痕が残り、凸面は格子叩き痕が残るが、平坦部から直立部にかけてはナデが、左側端面と凹面広端縁部はヘラケズリがされる。広端面は格子叩き痕が残る。浅黄橙色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。白鳳時代。

133 方形平瓦である。凹面に「大津宮址／昭和九 三一六」と墨書されている。

方形平瓦の狭端部から平坦部で、側端部は残存していない。凹面は布目痕が、凸面と狭端面は格子叩き痕が残る。凹面側端縁部はヘラケズリがされる。にぶい橙色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。白鳳時代。

134 方形平瓦と思われるが、直立部がない。凹面に「大津宮勸学院／(拾得瓦片カ)」と朱書されている。

方形平瓦の平坦部で、左側面部が残る。凹面は布目痕が、凹面側縁部、側端面、凸面は格子叩き痕が残る。浅黄橙色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。白鳳時代。

g.118 大津市坂本城址（図2-135、図3-136、写真図版1-135、写真図版2-136）

①概要

大津市下阪本に所在する城郭跡である。元亀2年(1571)に織田信長の命で明智光秀が築いた。天正10年(1582)の本能寺の変後に落城したが、その後再建される。天正13年(1585)、大津築城に伴い廃城となった。発掘調査で石垣や瓦葺礎石建物などの存在が確認されている。

②採集瓦

135 丸瓦である。凸面に「湖畔坂本城址古瓦／昭和十四年十一月一日拾(取カ)」と書かれた紙が貼付されている。

丸瓦の胴部から玉縁部で、右側面部が残る。凹凸両面とも摩滅著しいが、胴部凸面はヘラケズリがされ、玉縁接合部はナデがされる。凹面は布目痕が残る。凹面側縁部はヘラケズリがされる。褐灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土はやや粗である。安土桃山時代。

136 丸瓦である。凸面に「湖畔坂本城址古瓦拾取／昭和十四年十一月一日」と書かれた紙が貼付されている。

丸瓦の胴部から玉縁部で、右側面部が残る。凹凸両面とも摩滅著しく、調整は不明であるが、凹面に吊紐痕が残る。灰白色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。安土桃山時代。

h.119 大津市坂本梶井寺址（図3-137～142、写真図版2-137～142）

①概要

『近江輿地志略』（寒川1734）にいう「梶井旧跡」とみられる。『滋賀県の地名』の「東塔南谷」の項に「梶井門跡の本坊円融坊」という記述があり、比叡山山中にあったものとみられる。昭和初期の「史跡調査」には「坂本村坂本梶井門跡円徳院西南院旧跡地」という記載があり、『近江輿地志略』の記述から「円徳院西南院旧跡」とともに江戸中期までに廃絶していたものとみられる。

②採集瓦

137 丸瓦である。凹面に「梶井」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、右側面部が残る。凸面は縄叩き痕が残り、凹面から側面にかけてヘラケズリがされる。黄灰色を呈し、焼成は良、胎土は良である。奈良時代。

138 丸瓦である。凹面に「(梶カ)井」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、端部は残存していない。凹凸両面とも摩滅著しく、調整は不明である。浅黄褐色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。奈良時代。



図 3 採集瓦 3 (136 ~ 154)

0 10cm
(S=1:6)

139 丸瓦である。凸面に「梶井」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、端部は残存していない。凹凸両面とも摩滅著しく、調整は不明である。にぶい橙色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。奈良時代。

140 丸瓦である。凸面に「梶井殿」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、端部は残存していない。凸面は縄叩きのちヘラケズリがされ、凹面は糸切痕が残る。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。鎌倉時代か。

141 平瓦である。凹面に「梶井御殿」と墨書されている。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹面は横ナデがされ、凸面は斜格子叩き痕が残る。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。白鳳持代。

142 平瓦である。凸面に「梶井殿」と墨書されている。

平瓦の体部で、左側面部が残る。凹凸両面とも摩滅著しく、調整は不明である。浅黄橙色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。鎌倉時代か。

i.120 滋賀郡堅田町衣川寺

（図3-143・144、写真図版2-143・144）

①概要

大津市衣川二丁目にあった飛鳥時代末期頃創建の寺院で、国指定史跡衣川廃寺にあたる。大正12年（1923）に江若鉄道建設工事中に瓦が出土し、寺院跡と認識された。昭和46年（1971）の国鉄湖西線建設に先立つ発掘調査や昭和50年（1975）の発掘調査で、7世紀中頃に創建し、7世紀後半には廃絶した寺院であったことが判明している。

②採集瓦

143 丸瓦である。凸面に「(堅カ) 田衣川寺」と朱書されている。

丸瓦の胴部で、端部は残存していない。凹凸両面とも摩滅・剥離著しく、調整は不明である。にぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

144 丸瓦である。墨書等はない。

丸瓦の胴部から玉縁部で、端部は残存していない。胴部凸面は縄叩き、玉縁接合部はナデがされる。凹面は布目痕が残る。灰白色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

j. そのほか（図3-145・146、写真図版2-145・146）

①概要

『目録』に記載されていないが、注記によって採集地がわかるものを掲載する。いずれも滋賀郡真野村出土と書かれているため、真野廃寺（大津市真野）に関わるものと思われる。

②採集瓦

145 丸瓦である。凸面に「滋賀郡／真野村出土」と墨書されている。

丸瓦の胴部で、左側面部が残る。行基式丸瓦の狭端付近と思われる。凸面は摩滅著しいが、ナデがされている。凹面は布目痕残り、側端縁から端面はヘラケズリがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。白鳳持代。

146 平瓦である。凸面に「滋賀郡／真野村出土」と墨書されている。

平瓦の狭端部から体部で、側端部は残存していない。凹凸両面とも摩滅著しいが、凹面には布目痕と模骨痕が残る。端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成はやや不良、胎土は良である。白鳳時代。

k. 採集地不明（図3-147～154、図4-155～165、

写真図版2-147～165）

①概要

採集地に関する墨書等が記されているが、判読できないもの（147～149）、墨書等が書かれていないもの（150～165）を一括して掲載する。

②採集瓦

147 平瓦である。凸面に墨書があるが、判読不能である。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹凸両面とも摩滅著しいが、凸面は斜格子叩き痕が残る。灰白色を呈し、焼成はやや不良、胎土は粗である。白鳳時代。

148 平瓦である。凸面に墨書があるが（「□（倉カ）□」）、判読不能である。

平瓦の体部で、右側面部が残る。凹面はナデ、凸面は斜格子叩きがされる。凹面側縁部から側面はヘラケズリのちナデがされる。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

149 平瓦である。凹面に朱書があるが、判読不能である。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹面は摩滅著しく、調整は不明である。凸面は斜格子叩き痕が残る。灰白色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。鎌倉時代。

150 丸瓦である。墨書等はない。

丸瓦の広端部から狭端部で、右側面部が残る。凸面は縄叩きのちナデがされ、凹面は糸切痕、布目痕、布袋の綴じ合わせ痕が残る。凹面側端縁から端面はヘラケズリのちナデが、広端面と狭端面はヘラケズリがされる。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

151 丸瓦である。墨書等はない。

丸瓦の頭部から胴部で、左側面部が残る。凸面はナデがされ、凹面は布目痕が残る。凹面側縁から端面と頭端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

152 丸瓦である。墨書等はない。

丸瓦の頭部から胴部で、側端部は残存していない。凸面は摩滅著しく、調整は不明である。凹面は布目痕が残る。端面はヘラケズリがされる。浅黄橙色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

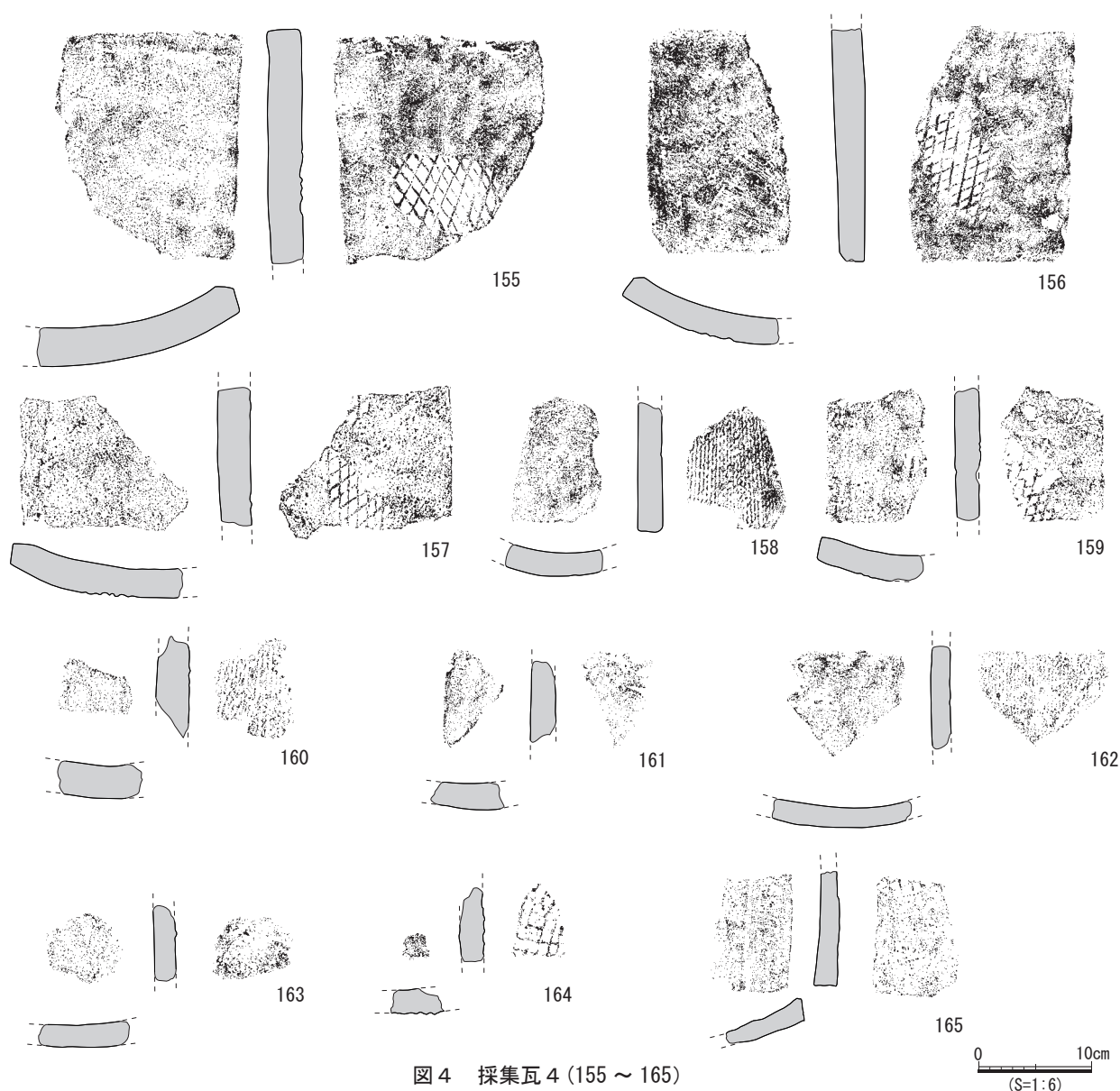


図4 採集瓦4 (155 ~ 165)

153 丸瓦である。墨書等はない。追加寄贈資料である。

丸瓦の胴部で、端部は残存していない。凸面は摩滅著しく、調整は不明である。凹面は布目痕が残る。浅黄橙色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

154 平瓦である。墨書等はない。

平瓦の体部で、右側面部が残る。凹凸両面とも摩滅・剥離著しいが、凹面は布目痕が残る、凸面には格子叩きのような痕がある。にぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良、胎土は良である。白鳳時代。

155 平瓦である。墨書等はない。

平瓦の体部から広端部で、右側面部が残る。凹面は布目痕が残る、凸面はナデのち斜格子叩きがされる。凹面側縁部から側端面、広端面はヘラケズリがされる。浅黄橙色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

156 平瓦である。墨書等はない。

平瓦の狭端部から体部で、左側面部が残る。凹面は板状

工具によるナデがされるが、一部模骨痕、布目痕が残る、凸面はナデのち斜格子叩きがされる。凹面側縁部から側面、端縁部から端面はヘラケズリがされる。灰白色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

157 平瓦である。墨書等はない。

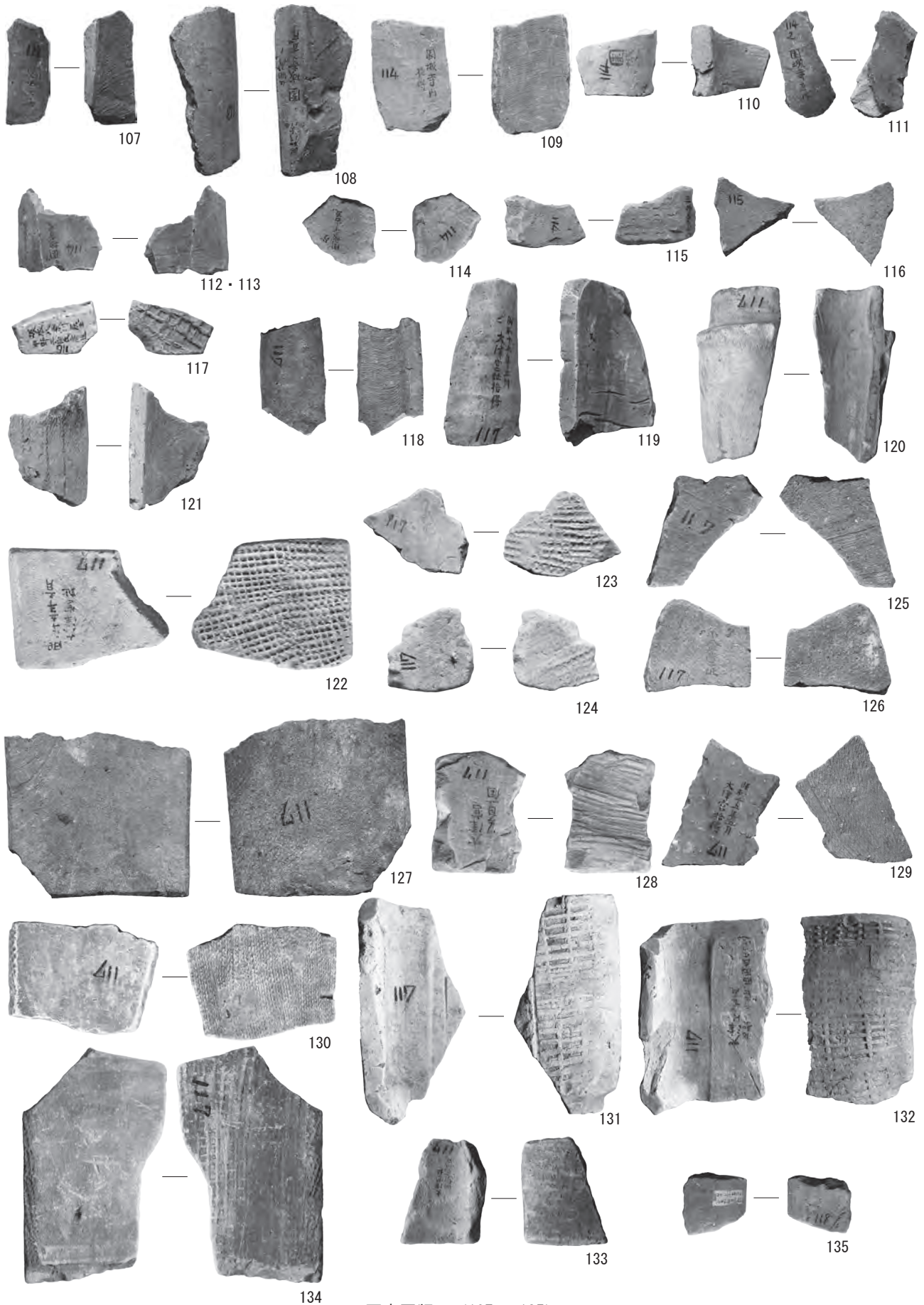
平瓦の体部で、左側面部が残る。凹面は糸切痕と布目痕が残る、凸面はナデのち斜格子叩きがされる。凹面側縁部から側面はヘラケズリがされる。褐灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土はやや粗である。白鳳時代。

158 平瓦である。墨書等はない。

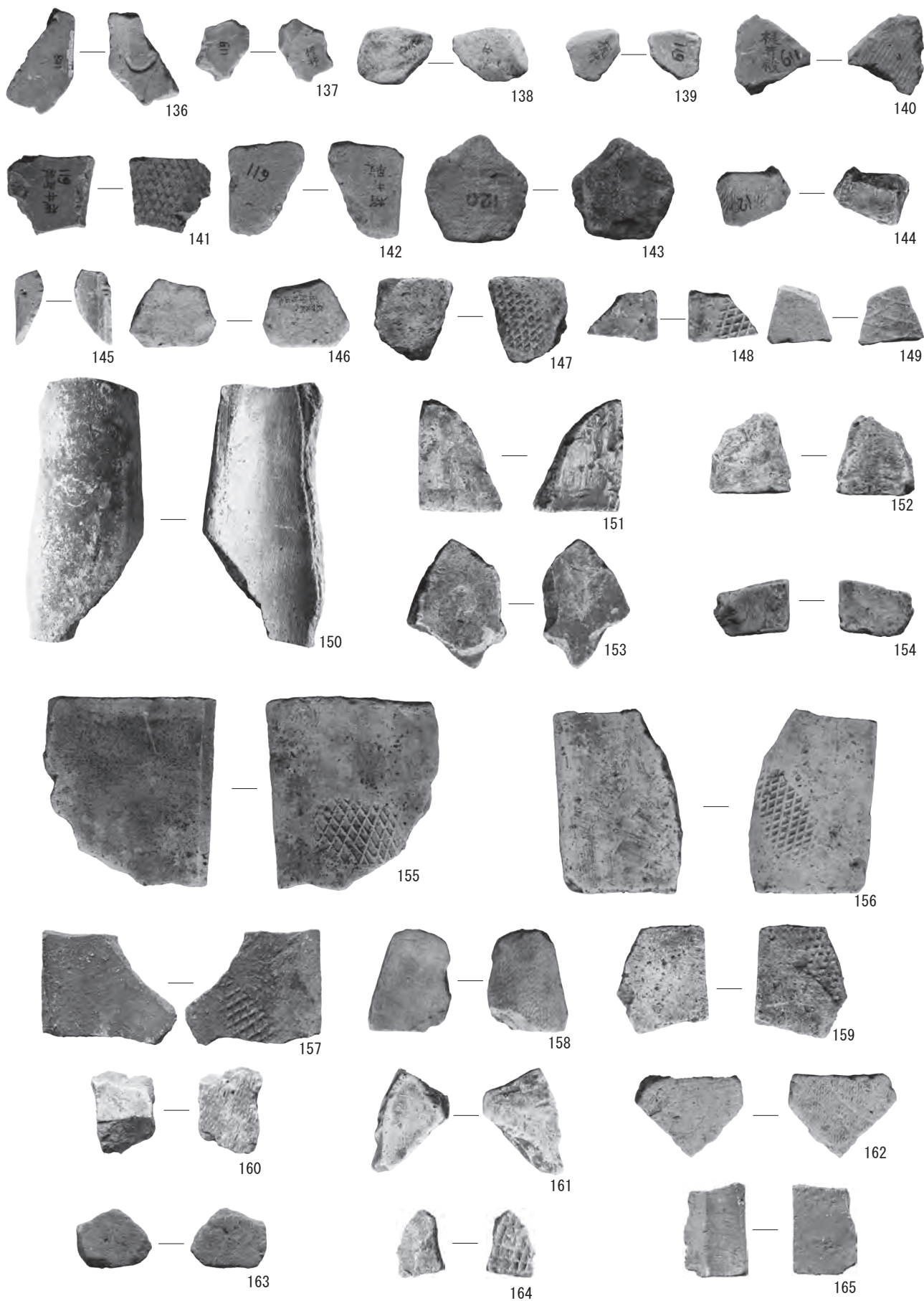
平瓦の狭端部から体部で、側端部は残存していない。凹面は布目痕が、凸面は縦位の縄叩き痕が残る。端面はヘラケズリがされる。浅黄橙色を呈し、焼成は良、胎土は良である。奈良時代。

159 平瓦である。墨書等はない。

平瓦の体部で、左側面部が残る。凹凸両面とも摩滅著し



写真図版 1 (107 ~ 135)



写真図版 2 (136 ~ 165)

いが、凹面は布目痕が、凸面は斜格子叩き痕が残る。凹面側縁部から端面はヘラケズリがされる。浅黄橙色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

160 平瓦である。墨書等はない。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹面は模骨痕と布目痕が、凸面は縄叩き痕が残る。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

161 平瓦である。墨書等はない。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹凸両面とも摩滅著しく、調整は不明である。浅黄橙色を呈し、焼成はやや不良、胎土は良である。白鳳時代か。

162 平瓦である。墨書等はない。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹面は模骨痕と布目痕が、凸面は縦位の縄叩き痕が残る。浅黄橙色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

163 平瓦である。墨書等はない。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹凸両面とも摩滅著しく、調整は不明である。明黄褐色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。白鳳時代か。

164 平瓦である。墨書等はない。

平瓦の体部で、端部は残存していない。凹凸両面とも摩滅著しいが、凸面は格子叩き痕が残る。灰白色を呈し、焼成は良、胎土は良である。白鳳時代。

165 平瓦である。墨書等はない。追加寄贈資料である。

平瓦の狭端部から体部で、右側面が残る。凹面は横ナデがされるが、一部布目痕が残る。凸面はナデのち格子叩きがされる。凹面側縁部から側面はヘラケズリがされる。にぶい黄橙色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

3. 三次元計測の実験的試行（図5・6）

本章は、「瓦編1」、「瓦編2」で報告した軒瓦について、改めて三次元計測を行い、その結果を掲載する。三次元計測の方法については、「遺物三次元計測の実験的試行」（山田・福井2023）に則って行ったが、今回はTIFFの解像度を300dpiに設定した。使用したソフトウェアは、Agisoft Metashape Professional（Ver.1.8.4）、GigaMesh（V.200529）、Adobe Photoshop（V24.2）、Adobe Illustrator（V27.3.1）であり、各バージョンは三次元データの作成時（令和5年3月現在）のものである（1）。そのほかの使用機材については山田・福井2023の通りである。

各解析の詳細は、「写真のアライメント」が精度最高、「高密度クラウド構築」が精度最高で深度フィルタは強、「メッシュ構築」が深度マップ品質は最高でポリゴン数は高、「テクスチャー構築」がテクスチャーサイズ4096で枚数は1枚に設定した。なお、3と41はこの設定で構築できなかったため、「写真のアライメント」の精度を中にしたところ解析ができた。

また、掲載はしていないが、山田・福井2023では行っていない方法による三次元計測も試行した。すなわち、iPad Pro（第4世代）搭載のLiDARとScaniverse（ver.2.1.4）などの三次元モデル作成アプリを用いた三次元計測などである。いずれもサーフェス画像がMetashapeで作成した三次元データよりも粗くなったため、作成だけにとどまっている。

なお、瓦当文様の掲載を目的にしたため、軒瓦全体の三次元モデルの作成は行わず、瓦当面のデータ収集のみとした。画像については凹凸をみるため、すべてサーフェス画像にしている。対象は「瓦編1」の菊丸瓦（8・32・39・40）と釘隠し（33）を除く35点と、「瓦編2」の軒平瓦（41）の計36点である。なお、総撮影枚数は1,886枚、撮影および現像はほぼ同時に行い、約8時間かかった。解析に関しては1点当たり約1時間かかっており、合計で約37時間かかった。RAWデータ、TIFF画像、Metashapeのデータ、ply形式ファイルを合わせたデータ量は約270GBである。参考にしていただければ幸いである。

4. おわりにかえて一瓦編総括一

「瓦編1」から3ヶ年かけて報告した「八雲書院資料調査報告＜瓦編＞」は本稿で終了となる。本章では、瓦編の総括として瓦編のまとめを行い、おわりにかえたい。

田中氏が採集した瓦の多くは、氏が奉職した高穴穂神社近郊にあたる崇福寺や穴太廃寺などの大津宮関連遺跡の瓦で、全体の約1/3を占める。大津宮関連遺跡の瓦でも、古いものでは飛鳥時代の穴太Ⅲ型式（小笠原・田中・西田・林1989）に当たる素弁蓮華文軒丸瓦（22）から、奈良時代の飛雲文軒瓦（28）、平安時代前期の均整唐草文軒平瓦（29）も含まれている。採集当時は大津宮と認識されていた地点でも、現在では穴太廃寺や南滋賀廃寺にあたる地点もあると思われるため、各遺跡の発掘調査で出土したものと比較する必要がある。

時代別に採集瓦を見てみると、飛鳥・白鳳・奈良時代の瓦が合わせて117点あり、採集瓦の7割強がいわゆる「布目瓦」といわれる古代瓦であり、それらを中心に採集していたようである。しかし、近世・近代の瓦も33点あり、幅広い時代幅で採集していたことがうかがえる。

地域別では滋賀県内が多く、県外は京都府（伏見城・下賀茂神社・周山廃寺・南禅寺）、奈良県（東大寺・正倉院・唐招提寺・橘寺・薬師寺）、愛知県（犬山城）がある。県外のものでも「寄送」という注記がないものは田中氏本人が収集をし、持ち帰ったものとみられる。

当人が採集したもの以外にも、「瀬津吉助氏（2）」、「本多氏（5・6）」、「矢野宮司採取（21）」、「明光氏（27）」、「西岡氏（59・131・132）」、「中野三郎氏（117）」といった人々から譲り受けたものが少なからずある。田中氏が譲渡したものがあのかは不明であるが、当時のコレクター同士での



図5 三次元画像1（1～7・9～17）

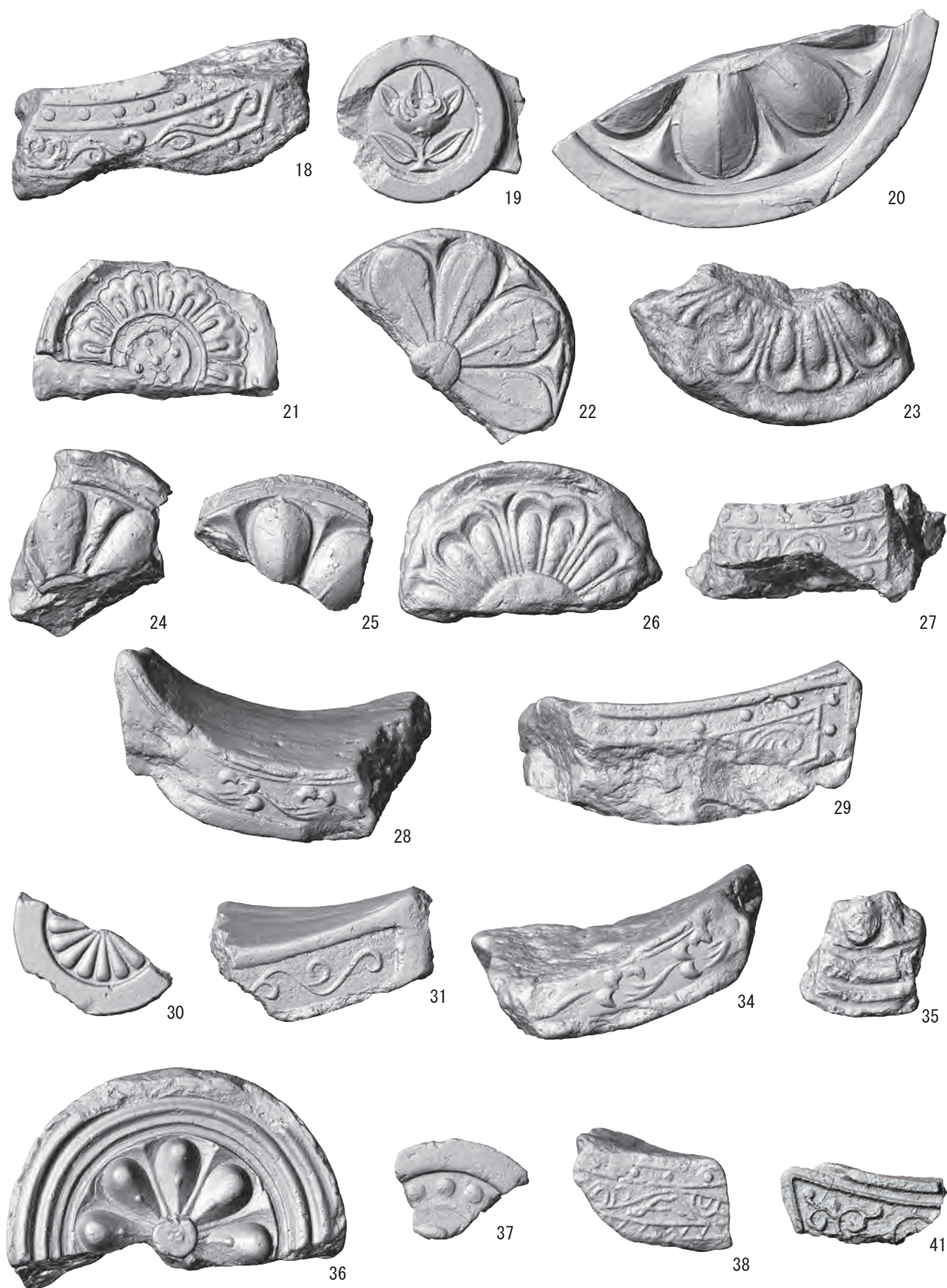
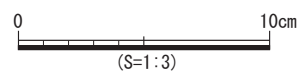


図 6 三次元画像 2 (18 ~ 31・34 ~ 38・41)



資料のやりとりがあったことがうかがえる。本資料群は、考古学的な資料価値だけではなく、そういった当時の資料のやり取りについても垣間見える、希少な資料群だといえよう。

【謝辞】

資料の実見に当たって、浅井歴史民俗資料館の清水隼子氏・富岡有美子氏・中山美穂氏・福井智英氏（調査時：令和4年度）には多大な御厚情を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

また、本稿執筆に当たり、小島孝修氏・辻川哲朗氏・富岡有美子氏・秀平文忠氏・福井智英氏には貴重な御意見を頂戴しました。併せて厚く御礼申し上げます（いずれも五十音順）。

註

(1) なお、令和5年12月末現在の最新バージョンについては、本誌に掲載されている拙稿（pp.73-78）を参照していただきたい。

文献一覧（著者名・機関名 50 音順、刊行年順）

芦田淳一（2019）「大和－中世瓦とその資料的可能性－」『中世瓦の考古学』高志書院

浅井中学校（1952）『八雲書院蔵品目録』

市本芳三（1995）「12. 瓦」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

上原真人（1990）「平瓦製作法の変遷－近世造瓦技術成立の前提－」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会

大脇潔（1991）「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』（奈良国立文化財研究所学報 第49冊）奈良国立文化財研究所

小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博通（1989）『近江の古代寺院』真陽社

小山正忠・竹原秀雄（2014）『新版標準土色帖（36版）』日本色研事業株式会社

粕渕宏昭（2000）「田中礎コレクションについて」『民俗文化』第437号 滋賀民俗学会

北村圭弘（2019）「近畿地方東部の一本づくり・一枚づくり」『第19回シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅧ－一本づくり・一枚づくりの展開2－発表要旨』奈良文化財研究所

公益財団法人竹中大工道具館（2017）『千年の甕 古代瓦を甞く』

古山明日香・福井知樹（2022）「長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編1＞」『紀要』第35号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

崔ゴウン（2018）「古代における瓦の製作道具について～『桶巻作り』による平瓦と丸瓦の復元作業を通して～」『竹中大工道具館研究紀要』第29号 公益財団法人竹中大工道具館

財団法人京都市埋蔵文化財研究所（1996）『木村捷三郎収集瓦図録』

佐原真（1972）「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号 日本考古学会

寒川辰清（1734）『近江輿地志略』（蘆田伊人編（1915）『近江國輿地志略 上』（大日本地誌大系第三冊）大日本地誌大系刊行会、蘆田伊人編（1915）『近江國輿地志略 下』（大日本地誌大系第六冊）大日本地誌大系刊行会）

滋賀県（2022）『令和3年度 滋賀県遺跡地図』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2001）『一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』

滋賀県ミュージアム活性化推進委員会（2019）『水谷隆信収集資料図録』

滋賀県立安土城考古博物館（2008）『仏法の初め、茲より作れり－古墳から古代寺院へ－』

滋賀県立安土城考古博物館・財団法人滋賀県文化財保護協会（2011）『大国近江の壮麗な国府』

坪井利弘（1976）『日本の瓦屋根』オーム社

鳥海幸一（2022）『フォトグラメトリの教科書』合同会社技術の泉出版

日本史広辞典編集委員会編（1997）『日本史広辞典』山川出版社

日永伊久男（1982）『南滋賀廃寺出土瓦の研究』

福井知樹（2023）「長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編2＞」『紀要』第36号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

平凡社地方資料センター編（1991）『滋賀県の地名』平凡社

山口欧志（2016）「考古遺物の三次元モデル作成」『文化財の壺』第4号 文化財方法論研究会

山田梨紗子・福井知樹（2023）「遺物三次元計測の実験的試行」『紀要』第36号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

挿図典拠

表1 古山・福井 2022、福井 2023 に加筆

図1～4 古山・山田・筆者実測

図5・6 筆者作成

写真図版1・2 筆者撮影

（ふくい ともき：調査課 技師）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.37 2024.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages